

前立腺肥大症の姑息的療法

—Gestagen 療法— (第2報)

岡山大学医学部泌尿器科学教室 (主任：新島端夫教授)

新 島 端 夫
田 中 啓 幹
高 田 元 敬CONSERVATIVE TREATMENT OF BENIGN PROSTATIC
HYPERTROPHY WITH GESTAGEN THERAPY
BY GESTONORONE CAPROATE (2ND REPORT)

Tadao NIJIMA, Hiroyoshi TANAKA and Motoyoshi TAKADA

*From the Department of Urology, University of Okayama School of
Medicine, Okayama, Japan**(Director: Prof. T. Nijima, M. D.)*

At the last report on SH-582¹⁾ clinical experience with gestonorone caproate (SH-582) was presented and proved that the weekly dosage of 400~600 mg was the most effective one.

In this report, the additional twenty cases of benign prostatic hypertrophy (BPH) were treated during relatively long term. In 35 cases of this and last reported cases, good resported were found in 40%.

On the second prostatic biopsy of a case (stage I), the evidence of adenocarcinoma was detected, and SH-582 was ineffective.

1) Nijima T., et al.: Acta Urol. Jap., 16(9): 508, 1970.

は じ め に

さきに、前立腺肥大症 (BPH) の姑息的療法として gestonorone caproate (SH-582) を投与した結果を報告した¹⁾。今回はさらに20例の各 stage のBPH 患者に投与期間をやや長くして SH-582 を投与したので、その成績を追加し、最後に前回の報告例をまとめて検討してみた。

症例および投与方法

SH-582 投与症例はすべて当科外来および入院患者である。BPH stage I 10例, stage II 4例および stage III 6例の計20例である。年齢は53~79歳 (平均68.3歳), 投与法は前回の報告¹⁾において、有効率の高かった 400~600 mg/week とし、これを2~3回にわけて筋注した。ただし、症例20のみは連日投与症

例である。投与総量は3~18.3g, 投与期間は症例20を除き、5~30.5週間である (Table 1)。

なお、症例4は治療中の2回目の前立腺生検で latent carcinoma を発見した症例である。

臨 床 効 果

臨床効果をみる目的で、残尿量、尿線、排尿障害および夜間尿について症例別にみたものが Table 2 である。まず残尿についてみると、stage I で増加したものはなく、stage II で 50 ml 以下に減少したものは4例中2例, stage III で 50 ml 以下となったものは6例中3例となった。つぎに、尿線と排尿障害はほぼ同様の傾向を示したので同時に表示した。stage I ではほぼ正常となったと訴えたものは4例、ややよくなったというもの3例, stage II ではそれぞれ1例と2例, stage III では自尿可能となったものが4例で

Table 1. SH-582 投与症例および投与法

No.	Patient	Age	B P H stage	Weekly dose	Total dose	Duration of therapy
1	Y. B.	71	I	400 ^{mg}	4.0 ^g	10.0 weeks
2	K. B.	55	I	400	4.0	10.0
3	T. U.	74	I	400	6.0	15.0
4	H. D.*	57	I	400	7.0	17.5
5	N. M.	53	I	600	6.0	10.0
6	N. G.	69	I	600	6.0	10.0
7	U. K.	70	I	600	9.0	15.0
8	S. D.	59	I	600	9.0	15.0
9	O. N.	63	I	600	6.0	10.0
10	H. R.	62	I	600	6.6	11.0
11	K. H.	74	II	600	7.5	12.5
12	S. K.	54	II	600	9.0	15.0
13	S. M.	74	II	600	6.0	10.0
14	Y. D.	77	II	600	6.0	10.0
15	O. M.	75	III	600	18.3	30.5
16	S. H.	78	III	600	10.2	17.0
17	T. M.	79	III	600	13.5	22.5
18	S. T.	78	III	600	6.0	10.0
19	N. J.	69	III	600	3.0	5.0
20	I. H. #	74	III	2,100	3.0	1.4

* Latent carcinoma. # Daily injection case.

Table 2. SH-582 臨床成績

No.	Patient	Residual urine		Force of Stream dysuria		Nocturia	
		Before ml	After ml	Before	After	Before	After
1	Y. B.	3	3	+	+	3~4	2
2	K. B.	0	0	+	+	0~1	0~1
3	T. U.	24	15	+	-	3~4	1~2
4	H. D.	0	0	+	+	2	1~2
5	N. M.	6	0	+	-	3~5	2~3
6	N. G.	16	0	+	+	1	1
7	U. K.	28	6	+	+	5~6	4
8	S. D.	2	1	+	-	2	2
9	O. N.	0	0	+	+	2~3	1~2
10	H. R.	0	0	+	-	1~2	1~2
11	K. H.	184	160	+	+	4~5	1~2
12	S. K.	78	45	+	+	3~4	1~2
13	S. M.	226	180	+	+	3~4	2~3
14	Y. D.	70	32	+	-	5~6	2~3
15	O. M.	CO	490	CO	+	CO	10<
16	S. H.	CO	CO	CO	CO	CO	CO
17	T. M.	CO	44	CO	+	CO	7~8
18	S. T.	CO	14	CO	+	CO	3
19	N. J.	CO	CO	CO	CO	CO	CO
20	I. H.	CO	22	CO	+	CO	6

++ Very severe, + Severe, + Slightly severe, - None, CO Complete obstruction

ある。これは留置カテーテルをおいた関係上直ちに SH-582 の効果とは判定しかねる点がある。夜間尿回数は各 stage とともに著明な減少を示したものはなかった。

直腸診および尿道膀胱撮影による前立腺の大きさ、硬度を SH-582 投与前後について比較したものが Table 3 である。まず、直腸診では前立腺の大きさが明らかに縮小したと思われるものは、stage I で 2 例、stage II で 2 例、stage III で 1 例みられ、やや縮小したと考えられるものは stage I で 3 例、stage II ではなく、stage III で 1 例となった。硬度は明らかに減じたと思われるものが stage I で 1 例、stage II で

はなく、stage III で 1 例、やや減じたと考えられるものは stage I で 4 例、stage II、stage III ともになしという結果を得た。しかし、直腸診は主観的資料であり、この点薬効評価の上では十分考慮しておかねばならない。

Urethrocystogram で follow up しえた 4 例では治療後明らかな改善がみられたものは症例 17 (stage III) の 1 例のみであった。なお、症例 4 の latent carcinoma の症例はむしろ UCG 上増悪がみられた。

副作用は前回の報告と同様注射部位の疼痛は全例訴えたが今回は impotence, anorexia などを訴えたものはなかった。

臨床効果を BPH stage 別ならびに投与方法別に表示したものが Table 4 である。ただし、症例 4 の prostatic cancer, 症例 19, 20 の短期投与例を除外し、残り 17 例についてみたものである。なお、効果判定の規準は下記に従った。前回の報告と同様、残尿量および自覚症状の両者とも改善したものを“有効 (improved)” どちらか一方が改善されるか、両者ともやや改善されたものを“やや有効 (slightly improved)”, ほとんどあるいは全く改善の みられなかったものを“無効 (unchanged)” とした。ただし、stage I では自覚症状によって上記 3 群にわけた。

これらの結果は Table 4 に示すとおりであるが、stage 別に分けると症例数も多くないので、前回の報告例とあわせて表示検討したのが Table 5 である。

400~600 mg/W の投与で stage I 9 例中 4 例 (44.4%), stage II 15 例中 6 例 (40%) に有効, stage III 4 例では 2 例 (50%) に有効という結果であった。やや有効例は stage I 3 例 (33.3%), stage II 7 例 (46.7%), stage III 0% という結果を得た。はっきり効果があつたものは 28 例中 12 例 (42.9%), なんらかの効果をみたものも含めると 28 例中 22 例 (78.6%) となった。200~300 mg/day の投与では stage III 7 例のうち、有効 2 例 (28.6%) である。投与方法は 400~600 mg/W 群がよく、投与期間としては、自

Table 3. SH-582 直腸診およびレ線検査成績

No.	Patient	Digital examination		Urethrocystogram
		Enlargement	Consistence	
1	Y. B.	—	—	— Worsened
2	K. B.	—	+	
3	T. U.	++	—	
4	H. D.	—	—	
5	N. M.	++	+	
6	N. G.	—	—	
7	U. K.	+	+	
8	S. D.	+	+	
9	O. N.	—	—	
10	H. R.	+	++	
11	K. H.	+	—	— ++
12	S. K.	+	—	
13	S. M.	—	—	
14	Y. D.	—	—	
15	O. M.	+	+	
16	S. H.	—	—	
17	T. M.	++	++	
18	S. T.	—	—	
19	N. J.	—	—	
20	I. H.	—	—	

++ Improved, + Slightly improved,
— Unchanged.

Table 4. SH-582 臨床効果

	Stage	Case	Total dose	Duration of therapy	Improved (%)	Slightly improved (%)	Unchanged (%)
400~600 mg/W	I	9	4.0~9.0 ^g	10~17.5 ^W	4(44.4)	3(33.3)	2(23.3)
600 mg/W	II	4	6.0~9.0	10~15	1(25.0)	2(50.0)	1(25.0)
600 mg/W	III	4	6.0~18.3	10~30.5	2(50.0)	0(0)	2(50.0)
Total		17			7(41.2)	5(29.4)	5(29.4)

No. 4 (prostatic cancer) and No. 19, 20 (short term treatment cases) were excluded.

Table 5. SH-582 臨床効果（前回報告例と併せて）

Stage	Weekly or daily dose	Case	Total dose	Duration of Therapy	Improved (%)	Slightly improved (%)	Unchanged (%)
I	mg/W 400~600	9	g 4.0~9.0	W 10.0~17.5	4 (44.4)	3 (33.3)	2 (23.3)
II	400~600	15	2.8~6.0	6.4~15.0	6 (40.0)	7 (46.7)	2 (13.3)
III	600	4	6.0~18.3	10.0~30.5	2 (50.0)	0 (0)	2 (50.0)
	mg/D 200~300	7	3.0~4.0	D 10~25	2 (28.6)	0 (0)	5 (71.4)
Total		35			14 (40.0)	10 (28.6)	11 (31.4)

覚症状の改善は比較的早期に現われるが、尿閉例では自尿可能となるまである程度の治療期間が必要であった。

全体として有効例は約40%に、やや有効もいれると68.6%となる。すなわち、本剤はBPHのとくに初期また、高齢者などで試みる価値があると思われるが、しかしその効果は自覚症状および残尿量の比較的減少を中心としたもので前立腺腺腫そのものの明らかな縮小をもたらすことは期待できない。

したがって手術適応例に本剤をはじめ、現在ある程度の臨床効果を認められている前立腺肥大症用の薬剤投与を続けて、手術時期を延引することのないよう注意すべきである。

ま と め

1) 前回の報告に加えて、今回は前回よりBPHにやや長期間SH-582を投与した症例20例の臨床効果を検討した。

2) 前回の報告とあわせて35例の臨床効果は、有効40%、やや有効28.6%、無効31.4%となった。

3) 前立腺生検でlatent carcinomaをみいだした1例ではSH-582に無効でむしろ増悪傾向がみられた。

4) みるべき副作用はなかった。

本論文は1970年7月11日東京でおこなわれた第2回SH-582シンポジウムにおいて発表した。

文 献

- 1) 新島端夫・ほか：泌尿紀要，16：508，1970.